

せざるべしや。日本の禪と念仏者とをみて、せいせざる者はかくのごとし。「無慈詐親、是彼怨」等云云。日蓮は日本国の諸人にしたし父母也。一切天台宗の人は彼等が大怨敵なり。「為彼除惡、即是彼親」等云云。無道心の者、生死をはなるゝ事はなきなり。教主積尊の一切の外道に大悪人と罵言せられさせ給、天台大師の南北並得一に、「三寸舌もて五尺の身をたつ」と、伝教大師の南京の諸人に、「最澄未だ唐都を見ず」等といわれさせ給し、皆法華經のゆへなればはぢならず。愚人にほめられたるは第一のはぢなり。日蓮が御勘氣をかほれば、天台・真言の法師等悦くやをもうらん。かつはむざんなり、かつはきくわいなり。

夫積尊は娑婆に入り、羅什は秦に入り、伝教戸那に入り。提婆・師子は身をすつ。薬王は臂をやく。上宮は手の皮をはぐ。釈迦菩薩は肉をうる。薬法は骨を筆とす。天台云、「適時而已」等云云。仏法は時によるべし。日蓮が流罪今生小苦なればなげかしからず。後生には大楽をうくべければ大に悦し。